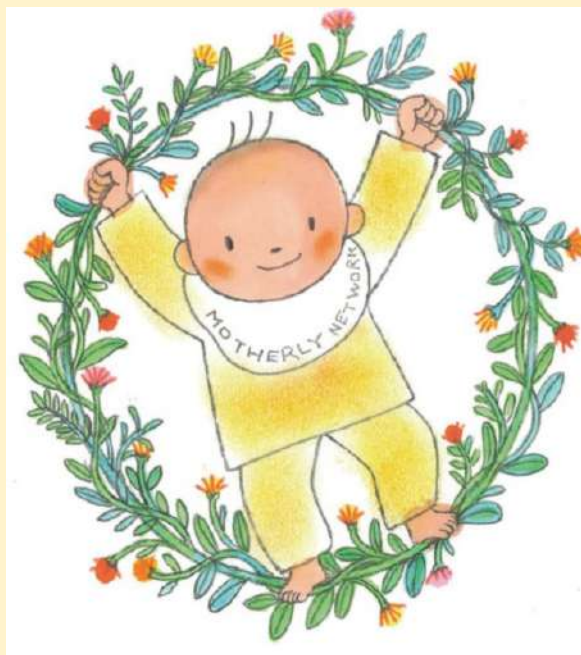


わ
環の会の

テリングってどんなもの？

vol. 3 ～我が家のテリング～



わ
認定NPO 環の会

<http://wa-no-kai.jp>

はじめに

この冊子を手にとってくださった方は、どんな方でしょうか？

子どもを迎えて、これから、テリングをどうしよう、と思っている方でしょうか？

子どもを育てているけれど、「真実告知」ができずに悩んでおられる方でしょうか？

環の会では、縁組により迎えた子どもを、大切な子どもとして温かく育てることができるように、子どもを迎えた、その日から「テリング」により、声かけをしながら育てることを勧めています。

実際に、そのように育てられた「子ども」たちも、親になる時代になりました。

「刷り込まれた！」と本人たちは言っていますが、血が繋がっていないことを大前提にして、家族となっています。

まだまだ、人生を歩む途上にある「子ども」たち、そして親たちではありますが、そんな家族のようすについて、多くの方に知っていただきたいと思います。

<子どもたちに必要な「真実告知」って、何でしょうか？>

こども家庭庁を始めとして、多くの機関が「子どもが小さい頃から、真実告知をしましょう！」と推奨しています。

環の会では、「告知」という、一方通行で一時的な情報伝達ではなく、「あなたは、大切な大切な、私たちが待ちに待っていた子ども」「〇〇さん（産みの親）が守り抜いてくれた大切な命」「〇〇ママ（産みの親）が、あなたの幸せを願って、託してくれた子ども」ということを、日常生活の中で、伝え、さらに、子ども自身の気持ちを聞きながら、誠実に応じていくことを「テリング」と呼んでいます。

「真実告知」を英訳した「telling」ではなく、「tell+ing（進行形）」つまり日常生活の中で話し続けましょう、という意味合いで、「テリング」と呼んでいます。

「具体的にどうしたらいいか、わからない」という声が多く聞こえてくるため、「こんな感じにしてはいいかでしょうか？」ということで、先輩たちの取り組みをお示しした「環の会のテリングってどんなもの？」を令和5年に発行しました。

令和6年には、テリングを受けて育った子どもたちが、今度はテリングをする側になっているようすについて、まとめたものを、vol.2として発行しました。

今回は、環の会で、育て親の方々定期的に発刊している「環新聞」に掲載された「我が家のテリング」コーナーから抜粋して、各年齢の子どもたちと向き合う育て親の方々、さらには、子ども自身の執筆による文章を、まとめてみました。

テリングを巡る育て親の思い、そして子どもたちの思いに、心を寄せていただければ、嬉しく思います。

お読みになってのご感想、ご意見、「これ、よかった！」とか「我が家では、こんな感じですよけど…」「僕の場合は、こうだよ…」などあれば、環の会の事務局宛て、お知らせください。皆様の声を基に、この冊子を、さらに次のvol.に繋げていきたいと考えています。

それでは、第3弾の冊子、「我が家のテリング」をお届けします。



我が家のテリング

子どもの成長は早いものです

早いもので子どもを迎えて11年、息子ももうすぐ中学生です。どこの家庭でも同じようだと思いますが、事あるごとに産んでくれたお母さんがいること、そして縁あって私たちの所に来てくれたことなどを話してきました。

子どもが小さいうちは、それが普通の家族と違うということが分かっていなかったのか、養子ということが理解できなかったのか、別に何を言うわけでもなく私の話を聞いていました。ところが幼稚園の頃、いつものように産んでくれたお母さんの話をすると、「そういう話は聞きたくない」と言われてしまいました。びっくりした私は話すのをやめてしまい、それから暫くの間その話題に触れることなく過ごしていました。

その後、子どもも小学生になり何年かたった頃、「僕〇〇市大好き！僕が生まれた所だから。〇〇お母さんにも会ってみたいな」と、言い出しました。〇〇市は、観光や買い物などで何度も行ったことのある場所でしたが、そんなふうに使っていたのかと思ううれしくなりました。

テリングを拒否され、何年もの間触れることのなかった話を子どもの方から言い出してくれ、正直ほっとしました。それからは以前にも増して色々な話をするようになりました。喧嘩をすると、「きっと〇〇お母さんならもっと優しい」などと憎まれ口を言うようにもなりました。

最近子どもも大きくなり、あらためて話をすることも少なくなりましたが、養子であることを子どもなりに理解し、成長していつてくれていると思います。多少我がままなところもありますが、友達の悪口を言わない、母親想いの（お父さんごめんなさい）優しい子どもに育っています。これから中学生になり思春期を迎えますが、今まで通り子どもと共に私たちも成長していけたらと思っています。

とりとめも無いことを書いてしまい、皆さんの参考になるかどうか分かりませんが、これが我が家のテリングです。

(2008年12月20日号より)

養子であることを早めに伝えた方が良いとは思っていても

K(6歳、年長)がまだ赤ちゃんだった頃、養子であるということを早い時期に伝えた方がよいと理屈では分かっているけど、人間って弱いもので、実際に赤ちゃんのKを抱っこしていると、物心がついた時に可愛い息子に向かって本当に産みの親のことを話せるのだろうか、自分自身が真実に目を背けてしまわないだろうかと不安になっていました。

そんな時はいつも、「Kには、産んでくれたお母さんがいるんだよ」とまだ何も分からないKに向かってテリングの予行演習をしていました。でもそれは、自分自身に「養子縁組という特殊な親子関係をどう克服していくんだ」とテリングしていたのかもしれませんが。

そして、Kが幼稚園に入り、同級生の子どもたちに弟や妹ができる度に、夫婦で「Kから赤ちゃんが生まれることに関して質問されたら、産んでくれたお母さんのことをそろそろ伝えなければいけないね」と話し合っていました。

いつ、質問があるのか、お父さんとお母さんのどっちに質問をしてくるのか。色々想定問答を用意していたのに、Kは、なかなか、赤ちゃんが生まれることに疑問を持たないのです。

「お父さんは、おばあちゃんから生まれたんだよ」と話して、Kが「じゃあ、ぼくはお母さんから生まれたの？」と質問するように誘導尋問を試みたのですが、なかなか思う通りの質問をしてくれません。

そんなある日、友人から『ねえねえ、もういちどききたいな わたしがうまれたよのこと』という絵本を紹介されました。その絵本は、養親が主人公の女の子にどのようにして生まれたか、そしてどのようにして養親に迎えられたのかを話し、その女の子が何度もその時のお話をするストーリーです。とても自然で、とても愛情に満ちているので、私たち夫婦はこれを読んで、いっぺんで気に入ってしまいました。

Kと下の子のE(4歳、年少)にも、何度もその絵本を読んであげました。そして、「Kにも産んでくれたお母さんがいるんだよ」と伝え、「それじゃあ、産んでくれたお父さんは？」と質問をします。Kにとっては、いつもお父さんとお母さんがいるのだから、ごく自然な質問なのに、予想をしていなかっただけに、「もちろん、いるよ」とは言ったものの、ちょっとそれ以上の返答に困っていました。

またある時は、ナイーブで泣き虫のKは、他の子たちと違って、お母さんから生まれたんじゃないというのがショックだったのか、Eと一緒に絵本を読んでいたのに一人、席を外して泣いてしまいました。

子どもにとってみても、重い事実を受け入れなければならないわけで、大丈夫かなあと少し心配でしたが、子どもたちには驚くほどの適応力があるものです。自分が両親に愛されていたからこそ我々のところに託されたこと、その事実を受け入れることができるようになり、自分とEは、産んでくれた親が違ふことや、環の会の友達は皆、自分と同じように養子なんだということも少しずつ理解を深めてくれているように思います。

Kは、妹のEに、「Eと僕の産んでくれたお母さんは違うんだよ」とテリングをしてくれています。Eも何だか分かったような顔をしているので、苦笑してしまいます。

この前、お風呂で妻に「産んでくれたお母さんの名前はなんて言うの？」「まだ、生きているの？」と質問したそうです。逆に、「会いたいのか？」と聞いてみたら、「うん」だって。やっぱり、心のどこかで産みの親のことを気にしているのでしょう。でも、自分が、逆の立場だったら、やっぱり、気になると思います。これからも成長するに従って、我々夫婦がドキッとするような質問をしてくるかもしれません。お互いの立場を理解合って、そんな質問ができるような家庭を作っていきたいと思います。

テリング(Tell+ing)のingは進行形で、1回こっきりの話ではなく、お互いの立場を理解し合おうとする語らいなのではないでしょうか。

(2000年4月10日号より)



環の会って大っきな家族だね

我が家の子どもは3人。お調子者でやんちゃな春から中学1年生の長男、まじめでスポーツ大好き小5の長女、頑固にマイペースな年少の次男。それぞれまったく異なる個性を持っている。そして、長男は今年お母さんが自分を産んでくれた歳になる。何年も前からその時になったら彼は何を思うだろうと気になっていたが、案外普通で「お母さんはこんな歳でぼくを産んでくれたなんてすごいね～」だそう。

上の2人が小さいころは意識して、産んでくれたお母さんのこと、環の会のこと、多くの人たちの支えがあって私たちが家族になれたことを繰り返し話してきた。まだ全部理解できなくても、心に残っていつかわかってくれるだろうと。幼い子にそんなことを言うのはかわいそうだと親切心からアドバイスしてくれる人もいたけれど、この子たちはかわいそうな存在ではないし、ウソやごまかしをする理由も見当たらないし、必要もなかった。

保育園のころ、お母さんが2人いることが当たり前だと思っていた子どもたちは、「〇〇ちゃんはお母さんが1人しかいないんだって！！かわいそうだね～」とびっくりしたり（普通お母さんは1人なんだよ～）、横田さん（環の会前代表）が産んでくれたお母さんだと思っていたり（えーっ！どうしてそうなの？）……。

また、次男を迎える前には長男・長女ともよく話し合った。赤ちゃんを迎えれば、きっと自分たちも迎えた子どもであることが友達にも知られてしまうし、いろいろ聞かれるに違いない。案の定次男を迎えて数日後、長男の同級生から「お前のうちはみんな血がつながっていないんだよな？あかの他人なんだよな」と言われたらしい。しかも面白がった数人が「あかの他人！あかの他人！」とはやし立てたそう。興味本位でいろいろ聞いてくるその子のお母さんに、何とか理解してほしいと思って時間をかけて説明したばかりだった。ごめんね。上手く伝わらなかったばかりかこんなことになるなんて。あまりのことに涙をこらえていると「大丈夫だよ、お母さん。だからどうした！何か問題があるのか！俺たちは本当の家族なんだからな！って言ってやったから」と長男。こらえられず涙がこぼれた。彼がそうやって強いられるのも環の会のみんなもそうだって思えるからかな。ちなみに4年生のときの「僕の宝物」という課題では「家族」と答えていたそう。

また次男を迎えにいった時は、産んでくれたお父さんとお母さんから「頼むぞ」と子どもたちは小さな命を託された。涙を流して幸せを願うお父さん、お母さんの気持ちをきっと2人はしっかり受け止め、そして自分たちもそうであったことを感じただろう。

私たちは血がつながっていない分、みんなにとっては当たり前の「家族」について考え、悩む機会がたくさんある。そして有難いことに、困ったときには相談し合える環の会の仲間がいる。子どもたちにとってもそれは同じで、環の会の友達は学校の友達とは違った特別の存在のよう。これから本格的な思春期に突入する長男、長女。どんなことが起こるのやら。そのときは先輩方、よろしくお願いします。

「環の会って大っきな家族だね」、長男が4歳の時に言った言葉が忘れられない。

(2015年4月28日号より)



こんな私をここまで育ててくれてありがとう

こんにちは。今年の春から大学生、自分の憧れていた看護師という道への進学。親元を離れて過ごすという不安もありますが、今はドキドキワクワクという気持ちが大きいです。そして6年間続けていた塾も終わり、学校も卒業前でほとんどなく、バイト三昧の日々を過ごしています。

私はあまり人前で話すのは得意ではなく、環の会のイベントに参加しても、ママとしか話さない、大人しい子とよく言われていました。しかし仲の良い友達や親の前では私の方がよく話す方で、友達にも「Aちゃんこんな話すんや」と言われます。

私が受けたテリングの話をしたと思います。まず私が聞くことを全て包み隠さず、何時間も私が理解するまで話してくれたことが一番だと思います。もう1人お母さんがいるということはもちろん、今では家庭を持っておられるということなどなど話してくれました。また、環の会の行事にも出来るだけ連れて行ってくれました。そこで私みたいな環境の子は沢山いるんだなあ、1人じゃないんだという安心感というのを感じることができ、自分のことを理解できました。小さい頃からテリングを受けていたこともあり、あまり混乱などはしなかった記憶があります。多分自分の中でも、産んでくれたお母さんと今育ててくれているお母さん(ママ)とを分けていたのだと思います。

友達関係など自分がイライラしている時、「育てれんくせに産みやがって」など、あまり産みの親のことをよく思わない時期がありました。しかしその時はママが、「産みの親がいなかったらAはおらんかったのよ」などと言ってくれました。その時、今自分が嫌なことも楽しいことも全て感じ過しているのは、産みの親が私を産んでくれたおかげなんだと思いました。その時にテレビドラマで、未成年で出産して子どもを手放すシーンでお母さんが号泣しているのを見た時、お母さんもこういう気持ちだったのかなと思ったりします。本当に産んでくれて有り難いなと感じるようにもなりました。

そして今私の身近で支えてくれてるのはママ！

少し前に私に初めて会った時に私を抱っこしている写真を見ました。そのママの顔は最高の笑顔で、なんか私はママに育ててもらえて良かったです。小学高学年から高校1年にかけての反抗期、私はあまり覚えていないのですが、今聞くと本当に申し訳なかったです。

こんな私をここまで育ててくれてありがとう。

(2019年4月1日号より)



環の会が提唱している『テリング』

※「環の会が提唱している『テリング』に関する検討と提言」
(環の会、2008)より一部改変

<テリング>

子ども本人のルーツを知る権利を守るということは、育て親と子どもに信頼関係が育まれているからできることです。育て親は、産みの親の存在を、子どもを迎えたときから伝え続け、子どもの思いに耳を傾け続けることが大切です。

そのことを環の会では「テリング(Telling : Tell+ing)」と呼んでいます。「真実告知」を英訳して、テリングと称しているのではありません。

「テリング」は、ある時、ある瞬間をさすものではなく、育て親と子どもの信頼関係に基づくもので、生き方の姿勢そのものであり、連続的な関わりです。

子どもが乳児の時のテリングは、育て親の練習期間になります。その子のルーツである産みの親の存在をめぐる何気ない会話が日常的にできることにより、子どもは、父や母が産みの親を大切な存在であると考えていることを知ることができるでしょう。子どもは、産みの親の存在について育て親と話ができるし、育て親が産みの親のことをどう受け止めているかについて聞くことができます。



テリングで伝えたいこと

「テリング」を行うにあたっては、まず、「テリング」する側の人、自分の心の中に、産みの親に対して、優しく、温かい気持ちを抱いているかを確認することが大切です。

命をかけて子どもの命を守った産みの親がいること。そのおかげで子どもは無事に生まれてくることができたこと。産みの親には事情があって、育てることができなかったこと。子どもは望まれて生まれ、望まれて家族になったこと。皆に愛されているからこそ、新しい両親と出会えたこと。子どもは、産みの親のおなかの中にいたことを知っています、その思いを大切にしようとする。子どもを信じ、子どもの気持ちに耳を傾けること。

子どもも大人もお互いの存在を尊重すること…。

「テリング」はこういう方法が一番正しいという形はありません。

どんな時、どんな場所、どんな人にもありのままでいましょう。そして何よりも、子どもの今日までのこと、現在の状態、そして未来のすべて、ありのままを大切なものとして受け入れ、愛し育むことです。

もし、あなたが迎えられた子どもだとしたら、両親にどう接してもらいたいですか。

自分について何を知りたいでしょうか。自分に置き換えて考えてみるのも大切だと思います。

「テリング」は勇気のいることです。努力も相手への思いやりも必要です。人間同志の心が結びついたからこそ家族になることができます。

一方的に行うことはありません。子どもの年齢に応じて、工夫し、いつも、お互いの気持ちを大切に、関わり、交流し続けることです。



おわりに

テリングをしているご夫婦、そして子どもたちの思い、感じていただけたでしょうか？

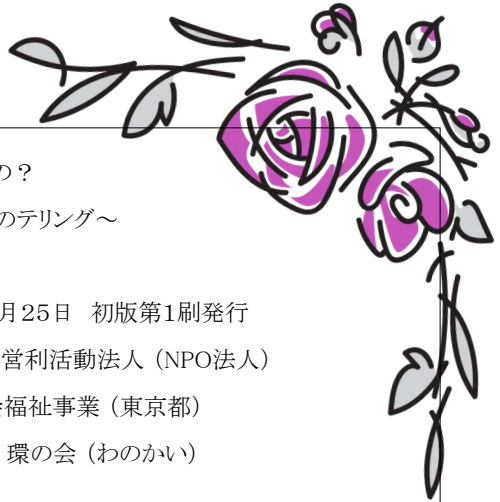
2000年～2019年の原稿でしたので、お読みになった方は、それぞれの子どもたちは、今、どうしているのだろうか？と思われたかもしれませんね。

それぞれ、会社員、看護師、大学生、中学生となり、元気に過ごしています。環の会の各種イベントに参加している方もいますので、よろしければ、会いにおいでください。

子どもと共に過ごす時間が、豊かなものになるように、この冊子がいくらかでもお力になれば、嬉しく思います。

環の会では、「子ども」の立場の方々が、Youthとして、独自の活動を進めています。環の会の中のみならず、里親を支援している機関などからもお声かけいただき、テリングを受けて育ち、テリングをしている立場の声を、さまざまな方にお届けする機会をいただいています。新しい家庭で育つ、小さな子どもたちと遊ぶイベントも開催しています。関心がある方は、環の会事務局まで、ご連絡ください。お待ちしております。

「環の会のテリングってどんなもの？」(小冊子2種)と環新聞(抜粋版)をご希望の方は、環の会事務局まで、ご連絡ください。



テリングってどんなもの？

vol.3 ～我が家のテリング～

令和7年(2025年)3月25日 初版第1刷発行

発行者：認定特定非営利活動法人（NPO法人）

第2種社会福祉事業（東京都）

環の会（わのかい）

環の会事務局

〒161-0033 東京都新宿区下落合4-23-13-502

TEL：03-3951-7270

<http://www.wa-no-kai.jp/>

E-mail：wa@wa-no-kai.jp

印刷所：三永印刷株式会社

* 本誌記載内容の無断転載を禁じます。

